



TITLE:

インターセックス -- 男と女についての一考察-- (随想)

AUTHOR(S):

西田, 悦郎

CITATION:

西田, 悦郎. インターセックス -- 男と女についての一考察-- (随想). 泌尿器科紀要 1973, 19(1): 1-2

ISSUE DATE:

1973-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121478>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 19 巻 第 1 号

1973年1月

随 想

イ ン タ ー セ ッ ク ス

——♂と♀についての——考察——

西 田 悦 郎*

婦人科を訪れる Intersex の多くは、ご承知のように Pseudohermaphroditismus masculinus で、しばしば Hoden があります。このような人びとの治療には肉体面の治療と精神面のそれがありますが、私どもがとかく苦勞し悩ませられるのは Intersex の人の精神面といえますか、psychosexual な面についてです。

肉体面の治療については、まあこれもしろいろと問題があるといえはありますが、結果的には、わが国の人口動態の男女比を医師の手でほんのすこし変えることにするかどうかの決断さえ下せば、あとは教科書や手術書どおりに事をすすめれば多くの場合それで上々です。

ところがいっぽう、Intersex の人の精神面のこととなると、いくら症例を重ねてもそのたびにとまどいます。女性として、女性グループの中で20数年間生活しながら、どうもいかつい粗暴な人があるかと思えば、いっぽう、Hoden がありながら、まことに女らしく、物腰といい、話しぶりといい、羞恥心といい全く女性そのものという人にもときどきでくわします。精神分析学の素養のない私どもはまことに複雑な心情におちこみ、混乱してきます。

人びとが「男性」的、「女性」的という場合、その脳裏には「男性」とはこういうもの、「女性」とはこうあるべきものというようなひとつの理想像なり、期待される男性像・女性像が描かれていることと思われます。

そして、「男性」の特性としては、たくましさ、闘争心、能動性、自主独立、独創性、理論的、勇敢、粗暴などがあげられ、いっぽう「女性」の属性としてはやさしさ、協調性、受動的、従順、維持管理的、情緒的、臆病、繊細などが列挙されます。洋の東西を問わず男性優位の社会ではこれが男女の通念ともいえましよう。

しかしよく考えてみると、一般に「男らしい」態度といわれているものの多くのものは、「男性」というより、「責任あるもの」の態度として期待される条件とほぼ同内容であり、また、「女性的」態度として求められているものは、「女性」というより「従属者」に要求される要素なのかもしれません。

*金沢大学医学部教授（産科婦人科学）

この「男性的」とか「女性的」という語で表現されている資質のどの部分が Androgen に由来する面で、どこからが男性優位社会における教育やしつけによって形成された性質なのかを明らかにすることは重要なことと思われます。

Androgen を有する性として（俗に言えば Hoden を有するものとして）、どのような性質が本来の姿で、どのような態度がたいせつなのかについて再検討の要がありそうです。

むかしから一姫二太郎などといわれますが、これは女の子のほうがおとなしくて育てやすいので、育児になれない最初は女の子のほうがいよというところからいわれたことわざのように思います（一姫のほうが早く孫がみられるという利点もありますが）。男の児はとかくやんちゃです。そのくせすぐ病気をします。こんな小さなときにホルモンを測定しても男女差を証明するのは困難ですが、これもやはり Androgen のなせるわざと考えられます（男女のホルモン差は Androgen と Estrogen の対比として考えるより、まず Androgen の有無として考察するのが当を得ているようです）。それとも XY の染色体も影響しているのでしょうか。このようなことも、ひょっとして Intersex の研究から糸口がひらかれてくるかもしれません。

Intersex が男と女の接点として注目をひいたのは原始以来のことでしょう。わが国でも絵草紙などの類にふたなりとか、はにわりとして Intersex の図が描かれていますが、どうもかたわを見る眼でしか描かれておらず、蔑視と恐れと興味とが主調のように思われます。

これにくらべると、ヨーロッパの Intersex はとても romantic です。Hermes と Aphroditos の美男美女を両親にもつ美青年 Hermaphroditos(-tus) に一人の Nymph, Salmacis が恋いこがれ、ついに一身同体になったというおはなしなど、Intersex についてまことに肯定的な見方をしています。Hermaphroditos の彫刻や絵画なども男女の不完全さを相補った、人間の一つの理想像への憧憬を表現しているように思われます。Intersex は神の作品（人間に与えた試練ではなくて）という見方のようです。また同様の神話にも人間は本来男女同体の Intersex であったが、あまりに有力で神に対抗するので、不完全な男と女に2分したというものもあるそうです。

男性も不完全な半分、女性も不完全な half、男女が合一協力してはじめて人格は完成し高められるのだという思想がヨーロッパの底を大きく流れているようです。その点わが国の伝統——中国思想の借り物かもしれませんが——のように、男は女性なしでも一人で、より高い人格者になれるという考えとたいへん異なるようです。

男性と女性とがどのような形で在るのが社会として最も望ましい姿なのでしょう。

風体、起居振舞からは、いずれが女性か男性か見きわめがたくなってきているこんにちの風潮、さらには性格や心情面の男女差さえ判然としなくなってきている現代は、社会の Intersex 化ともいえるようです。そのような社会では change of sex ; Geschlechtswechsel もまことに変わりばえないものになってしまうでしょう。

しかしこのような風潮がすすみ、♂と♀の記号が単に body sex を示すのみで mental sex を表わさなくなったとしたら、何か困ったことになりそうです。♂の記号が矢を形どっており戦の神 Mars (Ares) のシンボルであり、♀の記号が鏡を表わし美の女神 Venus (Aphroditos) のシンボルであったといういにしえに、大いなるあこがれを感じさせられます。